

## 発表者の略歴

蘭 信三：大和大学教授、上智大学名誉教授。歴史社会学、戦争社会学専攻。主な著書に『「満州移民」の歴史社会学』(行路社: 1994 年)。共編著に『戦争と性暴力の比較史に向けて』(岩波書店; 2018 年)、『引揚・追放・残留』(名古屋大学出版会; 2019 年)、『なぜ戦争体験を継承するのか?』(みずき書林; 2021 年)、『帝国のはざまを生きる』(みずき書林; 2022 年)がある。

アンドルー・ゴードン：ハーバード大学歴史学部教授。主に日本の近代史を研究、著者には労働史、近代消費者の出現や広範囲で使用されている教科書『日本の近代史』(日本の 200 年)がある。2011 年 3 月 11 日の複合災害に焦点を当てた「日本災害デジタルアーカイブ」をハーバード大学で共同作成した。

森本 涼：プリンストン大学人類学助教。核と人間、そして人間以外の他者との間の移り変わる関係を探求する。著書に『Nuclear Ghost: Atomic Livelihoods in Fukushima's Gray Zone』。ニュークリア・プリンストンプロジェクト代表。

佐藤 翔輔：東北大学災害科学国際研究所准教授。京都大学大学院博士後期課程修了(2011)、博士(情報学)。東北大学助教を経て、2017 年より現職。令和 3 年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞(実証研究と技術支援に基づく効果的な震災伝承に関する研究)などを受賞。

アンナ・ヴィーマン：ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン助教。ルール大学ボーフムで日本語学とフランス文学・言語学の学士号、フィリップス大学マールブルクで平和・紛争研究の修士号、ハンブルク大学で日本研究の博士号を取得。ハンブルク大学日本研究講師、ハインリッヒ・ハイネ大学デュッセルドルフでリサーチ・アソシエイトを歴任した。研究分野は日本の市民社会・社会運動や災害の集合的記憶など。

ゲルスタ・ユリア：東北大学災害科学国際研究所(IRIDeS) 災害文化・デジタルアーカイブ研究部門助教。3.11 後のコミュニティ再建における地域文化の役割に関する論文で、ベルリン自由大学にて日本研究の博士号を取得。研究テーマは、災害文化と集合的記憶、(負の)遺産保存、ナラティブとストーリーテリング、社会復興。

福本 英伸：いくまさ 鉄平(ペンネーム)は紙芝居作家、一般社団法人まち物語制作委員会 代表理事、東日本大震災の復興支援として震災後から被災地の物語を紙芝居にして届ける活動を続ける。被災者に届けた紙芝居は 170 本以上に達し、その内、震災や原発事故に関係する紙芝居は 70 作品に達する。福島では 10 以上のグループが結成され、語り部活動に活用している。

山本 武利：早稲田大学名誉教授・一橋大学名誉教授、インテリジェンス研究所創設者。主な著書に『占領期メディア分析』(1996 年)、『紙芝居—街角のメディア』(2000

年)、『朝日新聞の中国侵略』(2011年)、『陸軍中野学校―「秘密工作員」養成機関の実像』(2017年)など。

シャラリン・オルバー : ブリティッシュ・コロンビア大学現代日本文学教授、アジア研究学科長。2015年の著書『Propaganda Performed : 日本の15年戦争における紙芝居』は、1930年代から1940年代の日本における紙芝居の歴史と分析を提供している。

上田薫 : スタンフォード大学フーバー研究所ライブラリー&アーカイブスのリサーチフェロー兼日本ディアスポラ・コレクション・キュレーター。対面、オンライン展示、邦字新聞デジタル・コレクション (<http://hojishinbun.hoover.org>)、アーカイブ文書収集、その利用の促進を手掛ける。編著には「炎を扇ぐ：近代日本のプロパガンダ」(2021)がある。